

川島秀一著

『漁撈伝承』

花部 英雄

平成十三年の夏、宮城県涌谷町竪峯寺で行なわれた西行伝承研究会の後、何人かで金華山を訪れたことがある。その時泊まつた牡鹿町の旅館の神棚に、半紙に墨と朱で描かれた丸い巻貝のような絵柄のものがさげてあつた。傍にいた川島さんに尋ねると、これは宝珠の玉をデザイン化した正月のお飾り（本書の二七三頁）だよと言つて、分布地や絵柄の流行など、すらすら説明するのを聞いて感心した。また金華山にお参りした際、ここに漁師たちが参詣に来るのは櫻（本書の一九六頁）を探つて帰り、大漁安全祈願にするためでもあると言うので、皆で神社の裏手の方を探した。抹香くさいので鹿は食べず、それが逆に神木と崇めるのである。聞き取りで得た情報を実地に調べて確かなるものとするのが、川島さんの民俗調査の基本であることを改めて知らされた。

本書の著者の川島秀一さんがずいぶん以前から三陸海岸をベースにした調査を行ない、

その成果を発表していることは、『漁村』といふ雑誌を戴いたりして知つていて。その後もカツオ漁や和船のことなどで、調査範囲を全国に広げていることは聞いていたが、本書を読了して、まずその聞き取りの成果が十分反映されていることを確認した。同時に、漁村や漁民、漁労の裏に分け入つての簡潔な記述に、生きている民俗の確かな手ごたえを実感した。著者は気仙沼市の生まれであるが、生家は確かに直接漁業にはかかわっていないはずである。ある意味ではそのポジションが聞き取り調査に最適であつたのかかもしれない。

二〇〇三（平15）年夏、CMコピーがつぶやいた。液晶テレビのCMだった。「もう一度テレビに集まる家にしよう」。本書第一章の最初の節の見出しを、重信は一九〇六（明39）年の『女性宝鑑』からひいて付している。「家庭（ホーム）をつくれ」。

さて本書は、

（久山社、二〇〇三年 本体一五五三円）

第一章 寄り物とエビス
第二章 失せ物と竜神

第三章 山オコゼ

第四章 船靈様

第五章 アンバ様

第六章 大漁旗と大漁祝着

第七章 大漁の祭り

の七章から構成されている。ここでは章に従つて内容を紹介しながら、いくぶん私見をまじえていきたい。

第一章「寄り物とエビス」は、エビスと名のつく民俗語彙の事例を多方面に渡つて拾い集める。寄り来る魚から始まり、棒や石、恵比寿三郎の石像や図像、神樂の登場者、漁労の掛け声、人物の呼称などといった漁業を中心とした生活全般に渡つて事例を博搜する。

第二章「寄り物とエビス」は、エビスが漁民の福運の観念の中心にあり、しかもそれへの関心がいかに強いかを圧倒的な事例で示す。生活者の実態や実感を、語彙の上から学び取ろうとする姿勢は、語彙や言葉に強い信頼を置く□承文芸研究の視点と方法であり、本書は□承文芸プロパーのとらえた漁村民俗のすぐれた聞き書きといえる。

しかし読者によつては、いつたいたいエビスとは何、またその本質とは何か、そしてそれがどのような歴史的展開を経てきたのか、と

いった性急な結論を望む声もあるう。しかし著者は、そのような演繹的な方法による妥易な結論に走るより、禁欲的なまでに帰納法的な実証の結果をめざしている。それが、現実の漁民の実態や真実にせまることができると、いう直観に基づくものであろう。

ところで、本書の叙述について付言しておきたい。本書は、圧倒的な聞き書きに基づいているが、実は多くの報告書、研究書の成果を取り入れ、それを縦糸に織り交ぜている。巻末に百五十余の引用文献が紹介されているが、それによつて偏りのないきめ細かな民俗の伝承が形作られている。緻密で労力の多い作業である。

第二章「失せ物と竜神」では、過つて金物を海中に落とした時の「失せ物」を話題にする。海上の安全、および漁を左右すると信じられている、この禁忌は全国的に分布する。この過失を回復しようとする行為が「失せ物縁馬」であり、三陸沿岸から福島県いわき地方の海辺の神社に広く奉納されているといふ。ところが絵馬ではなく、宝剣を奉納する場所もあり、両者が複合する地域もある。さらに絵馬で

納する神社の立地条件、また奉納を金物で行なう例を取り上げながら、宝剣から金物、宝剣絵馬から実物絵馬への道筋を明らかにする。

ところで、なぜ「失せ物」に対して絵馬を奉納するのか。著者は、よくよした気持を切り替えるために行なうという漁師の言葉を引いて、氣分転換による効力を本質的なものと解く。これは贋眼である。漁民が禁忌にこだわり、また縁起をかついだりするナーバスな心理の背後には、信仰とは別に不安定な生活という現実が関わっている。それを制度的に示しているのが漁村における巫女の役割である。巫女が竜神(へビ)を媒介として行なう託宣や占いは、宗教的装いの奥に、漁民の不安を払拭するという現実的効用が働いている。著者が続けて「竜神」の項を設けた意図は、そこにもあつたと思われるが、ただ多少話題が拡散された感じで、十分展開されていない印象が残った。

第三章「山オコゼ」では、海と山との深い関わりを説いている。海上にある船が、山を利用して自分の位置を定めることを「山アテ」というのは広く知られている。これを三陸地方では「山バカリ」と称し、航行のためばかりでなく、根の位置を親から子へと伝授する「根

魚覚書」という文書が残されていることも含めながら、山バカリの微細に渡った知識の聞き取りを紹介する。山の利用には他にも、山に懸かる雲や、山頂から飛ぶ雪の様子での天候判断、また風による「山鳴り」、小高い所で聞く「海鳴り」（潮鳴り）といった予知もある。

こういったことから漁民は山を崇敬し、登頂参拝を行なう。三陸地方では「南部参詣」と称し、特定の山々を参拝する。さらに、漁民にとって山は、その山容を崇めるばかりでなく、山を領有する山の神を対象として、豊漁や海上安全を祈願する。その一つに「山オコゼ」がある。

海の神（竜神）と山の神とが争いをし、海には一匹でもサンマという魚があると言えば、山には一本でも山ガニ（八万。山桑のこと）があると応じ、山の神が勝つたという。また、山ガニに対し、海にはオクズと言うものがあるというので海の勝ちになり、そこで山の神はオクズを見たがるのだというアリエーションもある。このオクズとはオコゼのことで、気仙沼地方では乾いたタツノオトシゴをさすという。

山の神が、醜い姿をした魚名のオコゼを好むという伝承は有名であるが、三陸地方ではタツノオトシゴ以外にも、乾燥させたトカゲ

を言い、これを「モズのハヤニエ」という。モズが小枝に餌を刺しておいたものを用いるのだという。さらには山地の湿地に自生する

巻貝（キセルガイ）をオコゼと呼ぶ所もある。

ある。著者の丹念な事例収集は、今後そうした端緒を開いていくのかも知れない。

第四章「船靈様」は、「船大工」と「船靈」「船

卷貝（キセルガイ）をオコゼと呼ぶ所もある。

他にヘビの抜け殻や、あるいはヘビが交尾した所に置いていくとされる「ヘビの兜」を言

う地域もある。なかなか手に入らないといいうことで珍重するのであろう。三陸の漁師たちは、こうした山オコゼが漁を招くということ

で、海に携行したりするという。柳田国男が著者が三陸沿岸はそうした地形にふさわしい

このオコゼの信仰を、「山島に拠りて居を為せる」日本にふさわしいと述べたことを受け、と付言していることはうなずける。

山と海は、狩猟、漁獲という生き物の捕獲といった一致に限らず、生活や民俗においても共通する部分が多い。また近年、海の資源を山や森が育てているという、直接的な関係

ではなく、「思わぬ事故が突発しないだろうか、順調に大漁しているだろうかと、生涯心の休まる日とてなかつた」ものという。そ

うした船大工の思いを込めて、船の魂入れ（ゴシンイレ）が棟梁によつて、ひそかに静謐に行なわれる。三陸海岸から福島県にかけての

水が、海に多量の栄養分を補給している。その循環が崩れることで、沿岸の魚や海藻が減少するといわれる。オコゼをはじめとした漁民の伝承は、そうした山との関係を経験的に知悉していたのではないかと思わせるものが

唱える「お船靈様の祭文」や独特な呪文である。文字や言葉をも動員して神威を高め、か

つ安全を祈願していることがわかる。

船大工から引き渡された船は、続いて船頭の管轄になる。船の航行や、操業の安全、漁獲量の多寡は、船頭の技量に多く掛かってい。平時はもちろん、非常時においても万全を期すが、最後の人知を超えたところでは、天すなわち船靈様に頼らざるを得ない。水死者の処理や海難事故後の処理等、船頭は船靈を中心において、船の運営を行なう。船幽靈の対処の仕方や、豊漁の兆しの声を聞くなど、船頭は船靈様と深い関わりを持つ。普通には触れられることのない祭祀者としての船頭の側面を、本書は逃さずきちんと捕捉している。

沿岸漁業においては、女性の働きは大きい。夫が不安なく海の仕事に集中できる環境を作るのは、漁師の妻の大重要な役割である。本書にはしば名での気仙沼市小々汐の尾形栄七さんは、「陸にあることは海にある」と言い、陸上での家庭のできごとが船での事故等につながるとして、慎み深く、海で働く人と心一つにすることの大切さを説く。女性の才覚、切り盛りの巧みさが、漁労の安全に深く関わっている。船靈が才氣ある王婦を祭ったものであるという由来譚や、名船頭・桑名屋徳蔵話は、そうした環境なればこそ伝承さ

れてきたといえる。海の女たちは、単に家を守るばかりではなく、不漁に際しても積極的に関わった。三陸町甫領や石巻市桃浦の「タルイレ」と称するお神酒上げに、女たちは料理を作つたり、踊つたりして、眠やかに振る舞い、景気をつけ志氣を高める役目を果たす。また三陸地方では大漁時に小舟を呼ぶ「クルバ」を、不漁が続くと縁起を担いで、模擬的に「クルバ呼ばり」を実行したという。女が、男と一緒に漁や漁村を盛りあげてきたのである。こうした消えかけている漁村の風景や民俗を、著者は心を込めて記録する。

三陸沿岸にはイタコや神子と呼ばれる巫女たちがいて、漁師と深い関わりをもつていて。不漁続きたになると、漁師たちは巫女のものを作られるのは、漁師の妻の大重要な役割である。本書にはしば名での気仙沼市小々汐の尾形栄七さんは、「陸にあることは海にある」と言い、「陸上での家庭のできごとが船での事故等につながるとして、慎み深く、海で働く人」と心一つにすることの大切さを説く。女性の才覚、切り盛りの巧みさが、漁労の安全に深く関わっている。船靈が才氣ある王婦を祭ったものであるという由来譚や、名船頭・桑名屋徳蔵話は、そうした環境なればこそ伝承さ

れてきたといえる。海の女たちは、単に家を守るばかりではなく、不漁に際しても積極的に関わった。三陸町甫領や石巻市桃浦の「タルイレ」と称するお神酒上げに、女たちは料理を作つたり、踊つたりして、眠やかに振る舞い、景気をつけ志氣を高める役目を果たす。また三陸地方では大漁時に小舟を呼ぶ「クルバ」を、不漁が続くと縁起を担いで、模擬的に「クルバ呼ばり」を実行したという。女が、男と一緒に漁や漁村を盛りあげてきたのである。こうした消えかけている漁村の風景や民俗を、著者は心を込めて記録する。

三陸沖は黒潮に乗つてきたカツオの好漁場として、全国各地から漁船が集まつてくる。そのカツオ船に「カシキ」と呼ばれる少年を乗船させ、船員の食事を担当させるが、カシキはまた、船靈を祀る役割が課せられるため、船上での儀礼を中心的に行なつたりする。沖で船が泊まる場合、種々の神名を唱えながら手にもつた灯明を空中に放る「お灯明」を行なうが、著者はこれを「昼から夜への境界的な時間における儀礼」ととらえる。また、この時の唱え事に「隱岐の國焼火権現」という語があり、近世の北前船が隱岐の島が見えたところでタイマツの火を上げた習俗に基づいていると推測する。

カツオ船では、初めて船に乘る少(青)年は裸になり、男性器を薫しへで結び、体に鍋

墨を塗り、踊つたりする。船上での祝祭の要素をもつ、この鹿児島県薩摩半島の「サンコンメ」と呼ばれる儀礼は各地にあり、それを

「時間的な成人儀礼と、空間的な海域境界の通過儀礼」と、本質をふまえた見解を示す。

カシキは他に、カツオの初漁を船靈に上げたり、大漁して港に入る際、カツオのホシ（心臓）を船から岬の神に手向けたり、ある

いは神社に奉納するのをカシキが行なつたりする。船を代表するような大事な役割である。

こうした儀礼以外に、俗信、唱え言、世間話などにも関わっている。その一つに「カシキだけが助かる話」というのがある。船が遭難にあり、全員水死の憂き目に遭うが、ただ一人カシキだけは助かるというもので、船靈を祀るカシキが神の庇護を蒙るということであろう。

第五章「アンバ様」は、茨城県の桜川村阿

波の大杉神社を本社とする疫病除けの神で、江戸時代中期ごろ流行神の性格をもつて隆盛したが、現在では漁業の神として東北地方の太平洋沿岸部で信仰されている。このアンバ様の信仰、民俗を、聞き書きとともに明らかにしていく。

福島県のいわき地方では、アンバ様は「鳥小屋」と呼ばれる正月の厄祓いの行事で、子

どもたちがアンバの歌や、「アンバ大漁」を

囃し立てたりする。また、アンバと呼ばれる神輿を、若者が担いで「浜下がり」する祭礼

行事の行なわれている地域もある。アンバ様

は船靈様の親であるとか、帆柱のことをさす

とか言われ、漁業の神として定着している。

宮城県の一部沿岸でも、アンバ様の祭りの行なわれている地があるが、三陸沿岸では山

の神や農耕神と結びついてくる。氣仙沼市にアンバ、カンバ、ツケバの山名があり、漁民

は「山バカリ」に用いるが、それぞれ安波山、加波山、筑波山に基づいており、藩政時代の廻船の名残と著者はとらえる。アンバ様が祀

られる地域的特徴を見ていくと、海に面した小高い丘が多く、海から来る神を迎える意識

が働いているだろうと指摘する。こうした銳

い洞察の極致は、続くアンバ様と常陸坊海尊との関わりを説く部分にある。

海尊が桜川村の大杉神社に現れたことを始めとして、海尊（あるいは清悦）の足跡をし

るす伝説が太平洋沿岸にいくつかある。山伏修験の姿で阿波大明神の信仰の普及に努める

海尊と、天狗を眷族とする大杉神社の社僧と

は、歴史上のどこかで交錯しているであろう。

どうやら著者の視線は、アンバ様を通した海

尊伝説の解明に向けられているようである。

片々たる伝承を粘り強く探し求めながら、その確かな鉱脈を掘り当てようとしている。

さて、予定の紙数が残り少ない。第六章「大

漁旗と大漁祝着」、第七章「大漁の祭り」に

ついて論じる余裕がない。大漁旗、祝着、祭

りといった形のある民俗に触れたものであ

る。そのうち心に留まったことが一つある。

漁師の忌み嫌うこと、「シキナカにヨマス

するな（漁半ばに魚の勘定してはいけない）」

「魚を頼んでやると漁をしない」「先乗りをす

るな（船の到着時を尋ねてはならない）」と

いう言葉がある。計算高くしたり、ブレッ

シャーを与えたりするような思慮にかけた言

動を慎めということであるが、著者は「大漁

とか不漁とかは、神のみが左右できうること

であり、人間の力はどうにもならず、人が

判断すれば逆にあまり良い結果を生まない」と説明する。同感である。この考えは、狩猟

においても同様であるが、要は、自然に逆ら

わず、自然のままに生きることの大切さを、経験的に教えた智慧なのであろう。そうした

漁民の心意の機微を見のがさないところに著

者の書きの熟達がある。本書は、マニエア

ルによらず、言葉、心に鋭敏な研究者によつ